（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第19輯

貝掛遺跡

―― 発掘調査報告書 ――

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第19輯

貝掛遺跡

―― 発掘調査報告書 ――

18236

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

調査前全景

調査地全景

序　　文

阪南丘陵開発計画事業は、関西国際空港建設に伴い大阪府南部で計画された土砂採取予定地ならびに土砂採取後の跡地利用として空港業務関係の従業員用住宅としての利用を計画された事業地であります。

本事業地は、大阪府南部の阪南町に位置し、大阪湾岸より約2㎞程中に入った標高約100～180m程度の丘陵地で、砂岩・泥岩等で構成されています。

当該地については、開発計画が立案されるまで文化財については、あまりよく知られていなく、周辺に塚谷古墳群等が所在することが確認されていただけであります。このような状態であるので開発計画が具体化されてから文化財調査を実施することとなり、本協会が計画地全域について文化財の分布調査・試掘調査を大阪府企業局からの委託を受けて昭和60年・61年と実施した。その調査結果、遺構・遺物等の検出が確認された遺跡について、昭和61年の後半から順次発掘調査を行うことになりました。

今回報告する貝掛遺跡は、阪南町貝掛に所在し、開発事業地に進入するための進入路にあたり、試掘調査では遺物の包含が認められたので調査を行うことになりました。

調査の結果の詳細な事実は、本報告書に記載しましたが鍛冶炉を5基や和泉砂岩の破片を多数投棄した土坑などを検出することができた。また本調査地が文献ならびに遺構の検出状況から江戸時代に所在した「舞村」の跡地であることが確認されるなど多くの成果をあげることができました。

本発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府企業局、阪南町、阪南町教育委員会、その他地元関係者の皆様に多大なるご協力、ご支援を賜り、深く感謝いたします。また、今後の当協会の調査等にご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年3月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会
理事長　浅野素雄

例　　言

1．本書は関西国際空港建設に伴う大阪府泉南郡阪南町の阪南丘陵開発事業予定地内１号進入路予定地内、貝掛遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は大阪府企業局地域整備部内陸整備課の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．調査は財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査課第４班（班長　岩崎二郎）が担当し、技師　藤田幸夫が現地調査にあたった。

4．調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、大阪府企業局地域整備部内陸整備課、同阪南分室、阪南町教育委員会および地元関係各位の協力を得た。

5．調査および報告書作成にあたり当協会諸氏から指導・助言を得た。特に森村健一氏からは近世陶磁器に関して貴重な御教示を得た。記して謝意を表する。

6．本遺跡では、熱残留地磁器測定を実施した。結果は付論として収録した。

7．本書遺構図中の方位は国土座標第Ⅵ系の座標北を使用し、標高はT.P.で表示した。

8．調査に使用した地区割方法は、当協会が国土座標第Ⅵ系を基に独自に設定したものである。具体的には本文で示す。

9．本書では、上記の地区割とは異なる地区名も併用している。これについても具体的には本文に示す。

10. 空中写真は、国際航業株式会社・玉野総合コンサルタント株式会社による。

11. 遺物写真の撮影・焼付は当協会調査課資料係による。

12. 本書で用いた色調の表現は「新版標準土色帖」６版　1986年による。

13. 本書の執筆は藤田が担当した。

18236号

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
　第1節　分布調査……1
　第2節　試掘調査……1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……2
　第1節　地理的・歴史的環境……2
　第2節　阪南町史にみる舞村の沿革……4
第Ⅲ章　調査の成果……6
　第1節　調査の方法と経過……6
　　a）　調査の方法……6
　　b）　調査の経過……6
　第2節　層序……8
　第3節　遺構……8
　　a）　概要……8
　　b）　各検出遺構……8
　　c）　小結……30
　第4節　遺物……31
第Ⅳ章　まとめ……62
付　論　熱残留磁気測定……63

挿　図　目　次

第1図　周辺遺跡分布図……3
第2図　地区割模式図……5
第3図　調査区地区割図……7
第4図　土層図……9～10
第5図　Ⅰ区平面図……11～12
第6図　Ⅱ区平面図1……13～14

第７図　II区平面図２……15～16
第８図　II区平面図３……17～18
第９図　II区平面図４……19～20
第10図　II区平面図５……21～22
第11図　８－ＯＷ平面図……23
第12図　36－ＯＷ平・断面図……24
第13図　91－ＯＸ平・断面図……25
第14図　94－ＯＸ平・断面図……25
第15図　101－ＯＸ平・断面図……25
第16図　102－ＯＸ平・断面図……26
第17図　96－ＯＨ平・断面図……26
第18図　110－ＯＨ平・断面図、114－ＯＨ平面図……27
第19図　７－ＯＯ平面図……28
第20図　68－ＯＯ平・断面図……28
第21図　71・72－ＯＯ平・断面図……29
第22図　44－ＯＯ出土遺物実測図……32
第23図　90－ＯＯ出土遺物実測図１……34
第24図　90－ＯＯ出土遺物実測図２……35
第25図　５・80－ＯＯ出土遺物実測図……37
第26図　86・98－ＯＯ出土遺物実測図……39
第27図　22・87－ＯＯ出土遺物実測図……41
第28図　64・95－ＯＯ出土遺物実測図……43
第29図　34・35・42－ＯＯ、89－ＯＳ出土遺物実測図……45
第30図　７・30・37－ＯＯ、88－ＯＳ、91－ＯＸ出土遺物実測図……47
第31図　６・61・69・72・93－ＯＯ出土遺物実測図……49
第32図　８・36－ＯＷ、77・84・97・106・107－ＯＯ、110－ＯＨ出土遺物実測図……51
第33図　49・73・94－ＯＯ、92－ＯＳ出土遺物実測図……52
第34図　８－ＯＷ出土木製品実測図……53
第35図　22・106－ＯＯ出土土器、43－ＯＯ出土石製品実測図……55
第36図　５・44－ＯＯ出土石製品実測図……56

第37図　5・90－OO、8・36－OW出土石製品実測図…… 57
第38図　34・44・90・94－OO出土石製品実測図…… 59
第39図　6・42－OO出土瓦実測図…… 60
第40図　各サイトのパイロットサンプルの段階消磁結果の直交消磁図…… 67
第41図　各サイトごとの各試料の消磁前と交流消磁後の
残留磁化方向の等面積投影図…… 68
第42図　各サイトの平均磁化方向の等面積投影図…… 69

表　目　次

第1表　残留磁化の方位と強度及び平均方位とその信頼角…… 66

図　版　目　次

図版一　I区全景（南東から）
I区空中写真
図版二　II区全景（北西から）
II区全景（南東から）
図版三　I区土層堆積状況（北東から）
II区空中写真
図版四　II区空中写真
図版五　6－OO礫出土状況（南西から）
7－OO礫出土状況（南西から）
図版六　91－OX（南から）
101－OX（北東から）
図版七　102－OX（北西から）
96－OH（南から）
図版八　8－OW（南から）
図版九　36－OW（東から）
79－OHおよび土層堆積状況
（北東から）
図版十　遺構内出土土器
図版十一　遺構内出土土器
図版十二　遺構内出土土器
図版十三　遺構内出土土器
図版十四　遺構内出土土器・瓦・石製品
図版十五　遺構内出土土製品
唐津焼高台内の墨書
図版十六　8－OW出土木製品
42－OO出土瓦
図版十七　遺構内出土石臼未製品
図版十八　遺構内出土石臼および未製品
図版十九　遺構内出土石製品

第Ⅰ章　調査に至る経緯

第1節　分布調査

貝掛遺跡は阪南町貝掛に所在する。現在まで当遺跡の周辺は田園地帯としての景観を有している。今回、関西国際空港建設のための土砂採取地のひとつとして、阪南町南部の丘陵地帯が選定された。それに伴い、事業予定地内の埋蔵文化財調査の必要性が生じたため、昭和60年7月に大阪府教育委員会と大阪府企業局地域整備部内陸整備課との間で協議が行われた。その結果に基づいて大阪府教育委員会は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会へ分布調査の実施を指示した。同年9月当協会と企業局との間で調査の委託契約が結ばれ、9月26日より調査準備に取り掛かり、10月8日～11月20日の間に現地調査を行った。土砂採取地の1号進入路にあたる貝掛地区では、石鏃、須恵器をはじめ、中・近世の土器、陶磁器等が採集された[1]。

第2節　試掘調査

上記の分布調査の結果を受けて、当協会では大阪府企業局と委託契約を結び、貝掛地区では昭和61年から試掘調査を実施した。その南半部では瓦器片と小溝が、北半部では近世の陶磁器片が多量出土した。近世の陶磁器を多く出土した地点は近世の舞村跡地と推定された。なお、北半部には「舞ノ上」、「札場」、「札場下」、「札場東」、「札場西」等の字名が残り[2]、高札場のある舞村の状況が示されている。

1）『関西国際空港建設に伴う阪南町内埋蔵文化財分布調査報告書』　(財)大阪府埋蔵文化財協会　1985. 11

2）『阪南丘陵埋蔵文化財試掘調査報告書』　(財)大阪府埋蔵文化財協会　1987

第II章　遺跡の立地と環境

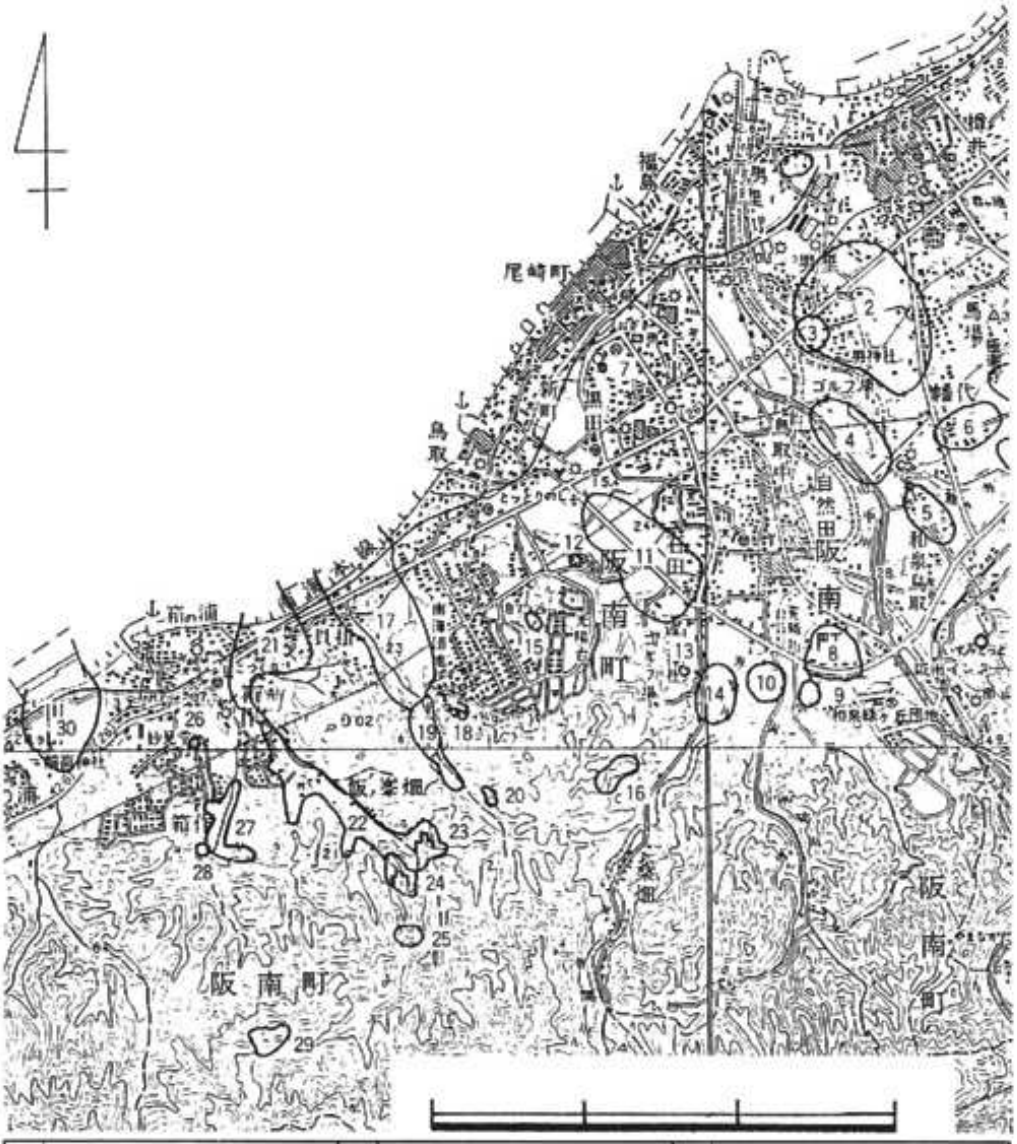
第1節　地理的・歴史的環境

貝掛遺跡の所在する大阪府泉南郡阪南町は大阪府の南端近くに立地する。阪南町は町域の大部分を和泉山脈およびそれより派生する丘陵が占め、男里川によって形成された沖積平野などの海岸の平地は狭い。

阪南町域における考古学的知見は、現在のところ少ないが、その中で最古のものは蓮池遺跡から採集された縄文時代草創期の有舌尖頭器である。他に縄文時代の石器を出土する遺跡として玉田山遺跡、岩崎山遺跡、寺田山遺跡、石田山遺跡が挙げられるが、遺跡の詳細は不明である。弥生時代から古墳時代にかけても神光寺遺跡で弥生時代中期の方形周溝墓が検出されただけで、土器・石器を出土する遺跡はあっても、その集落の実態が判明していないのが現状である。一方、古墳については前期の古墳はみられず、現在消滅してしまったが全長38mの前方後円墳の箱作古墳が中期のものと思われる。後期に至って高田山古墳群、玉田山古墳群、塚谷古墳群が築造される。奈良時代については田山遺跡で溝・井戸等集落に伴う遺構が検出された。他の遺跡では、奈良時代から中世にかけての集落については判明していない。以上のように阪南町域では、中世までの集落の実態が判明していないのが実情である。近世にはいると、和泉砂岩の採石が重要な産業となり、この頃から文献史料とともに、遺物の出土が多くみられる。

今回調査した個所は、和泉山脈から派生し、海岸際まで延びる尾根上である。貝掛付近は複雑に尾根が延び、尾根と谷が入り組んだ地形を呈している。現在では全てが耕作化されて、階段状に水田が分布している。貝掛遺跡の立地する尾根も頂部が平坦化し、小さな平地が重積している状況を呈している。この尾根の西側には釈迦坊川が流れ、北は紀州街道に面している。調査区の北半部は、太閤検地以来の舞村が所在した地と伝えられている。

参考文献　主として『阪南町史』上巻　1983　阪南町役場による。



1	天神ノ森遺跡	11	神光寺（蓮池）遺跡	21	箱作今池遺跡
2	男里遺跡	12	三昧谷遺跡	22	阪ノ峯畑遺跡
3	光平寺跡（光平寺石造五輪塔）	13	石田山遺跡	23	稲丸遺跡
4	平野寺（長楽寺）跡	14	井関遺跡	24	井山城跡
5	高田山古墳群	15	三升五合山遺跡	25	箱作ミノバ石切場跡
6	幡代遺跡	16	師道谷遺跡	26	箱作古墳
7	皿田池古墳	17	貝掛遺跡	27	茶屋遺跡
8	自然田遺跡	18	塚谷第1、第2、第3号墳	28	箱作仏屋谷石切場跡
9	玉田山古墳群	19	金剛寺遺跡	29	箱作細谷石切場跡
10	岩崎山遺跡	20	四郎太郎遺跡	30	田山遺跡

第1図　周辺遺跡分布図

第２節　阪南町史にみる舞村の沿革

前節で述べたように、舞村はすでに消滅し、現在の地表面には、その痕跡を留めていない。

地元の人達によって、大正年間まで家が建っており、舞村推定地から多量の陶磁器や瓦が出土したことや、現水田内に井戸と思われるものが存在することなどが判明した。

舞村についての文献史料も少なく、ここでは『阪南町史上巻』[11]に所収されている記述を中心として、年代順に並べ、その沿革の一端を窺ってみたい。

文禄３（1594）年　太閤検地では、村高33石８斗２升４合の小さいながらも独立した村落として認められている。

慶長15（1610）年　桑原伊賀守検地では、29石９斗８升４合

寛永８（1631）年　伊丹理右衛門による無地増高を加えて、43石８斗５升。

17世紀末　戸数12戸、人口67人で、浄土宗万福寺、妙賢（見）菩薩、年貢蔵があり、牛３頭、水利は臥樋・掛樋を貝掛村と共有していた。

元禄（1688～1703）初年　「泉州志」によると鳥取郷舞村庄屋治右衛門と記している。この庄屋名は貝掛村庄屋名と異なり、独自の庄屋とみてよい。

元禄11（1698）年５月　「和泉国絵図御用書付」に舞村庄屋三右衛門、年寄治右衛門とある。三右衛門は貝掛村庄屋であるので、独自の庄屋をもたなくなることが判る。

享保４（1719）年　10月改めの「西和泉郷村帳写」によれば、家数14戸でうち年寄１、百姓５、柄在家８、人口64人、牛１頭。寺は京都知恩院末万福寺で境内地１畝29歩、妙見菩薩社境内900坪で三昧（墓地）１個所があった。村役人は庄屋四郎右衛門（貝掛村と兼帯）、年寄武兵衛である。

天保５（1834）年　領主土屋采女正寅直で村高44石９斗４升９合６勺。

天保８（1837）年　舞村・貝掛村兼帯庄屋肥田弥兵衛、年寄仁兵衛の二人から提出された絵図によると、制札場をとりまく数軒の家、端に万福寺があり、釈迦坊川を少しさかのぼって湯谷池に沿う形で舞村妙見菩薩が描かれている。

明治７（1874）年５月　戸数３戸、人口12人となり、氏神も廃仏毀釈の影響か妙見宮の名が消え、字湯ノ谷に鎮座する谷社となっている。米・麦・大豆・菜種・砂糖・里芋を産出するが、もとより少量であろう。

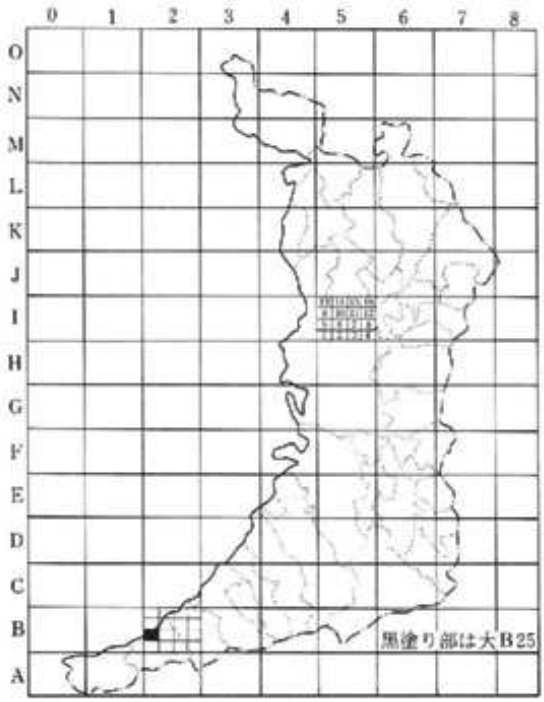
明治13（1880）年　家数２、人数９[2]

明治22（1889）年　市町村制施行により、貝掛村と合併。

大正期に消滅。

1）『阪南町史』上巻　1983　阪南町役場

2）『大阪府の地名』　1986　平凡社



第２図　地区割模式図

A	B	C	D
E	F	G	H
I	J	K	L

②　500mの区画

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

③　100mの区画

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査の方法と経過

a）調査の方法

Ⅱ区の調査地は、調査前は耕作地であり、現水田の畦畔・水路を分断する個所も生じたので、まず調査区の両側に仮水路を設置した。さらに、耕作、収穫期の農機具等の搬送、および土砂の仮置場への移動の必要性から、東・西に２分割して調査を実施した。

掘削についてはⅠ・Ⅱ区ともに、耕土・床土を機械で行い、それ以下については人力で行った。

地区名については、当協会の規程に基づいて行った（第２図参照）。国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ座標系をもとに、４×４ｍの区画を最小とするものである。区画の呼称については、大阪府発行新版の1/2500地形図の名称に従い（例大Ｂ－２－５）、この地図を500ｍの方形区画に12等分し、北西から南東へＡ～Ｌの記号を付ける（例大Ｂ－２－５－Ａ）。次にこの区画を100ｍの方形区画に25等分し、北西から南東へ01～25の記号を付ける（例大Ｂ－２－５－Ａ01）。さらに100ｍの方形区画を４ｍの方形区画に625等分し記号を付ける（例大Ｂ－２－５－Ａ01ＡＡ）。

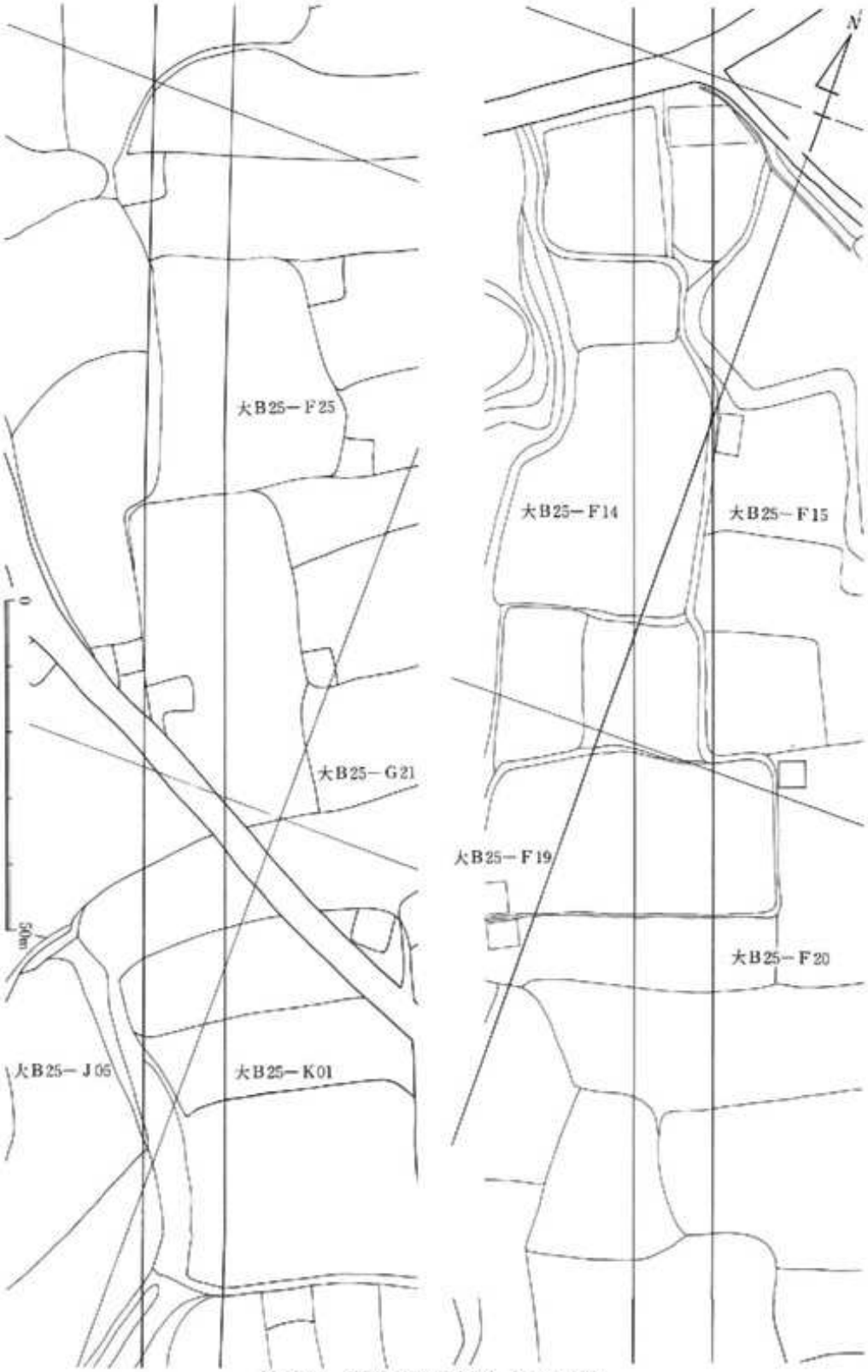
これによると今回の貝掛遺跡は大Ｂ－２－５－Ｆ14・Ｆ15・Ｆ20・Ｆ25・Ｊ05・Ｋ01の100ｍ区画に位置している。

遺構名は当協会の規定により、検出順に番号を付し、番号の終了に遺構の種類の記号をつけて表示する。本書で使用する遺構の種類の記号を次に示す。

炉	ＯＨ	ピット	ＯＰ	井戸	ＯＷ
土壙	ＯＯ	溝	ＯＳ	その他・不明	ＯＸ

b）調査の経過

調査はまず、Ⅰ区を先に実施した。Ⅰ区の調査は昭和62年４月16日から５月27まで実施した。引き続いて６月１日からⅡ区の調査を開始した。Ⅱ区は先に述べたように、東・西に２分して調査を行った。まず西半部の調査を７月27日に終了し、７月28日から一部を埋め戻しながら東半部の機械掘削を開始した。東半部の調査は９月７日に終了し、大阪府教育委員会の指示により、Ｂ区北半部の遺構密集部分については保護砂による埋め戻しを行っ



第３図　調査区地区割図（１：500）

た。9月9日には全ての現地作業を終了した。その間9月6日に開催された阪南町所在の井山城跡現地説明会の際に概要を説明し、発掘現場を公開した。

第2節　層序（第4図）

土層堆積状況は、大きく南北に二分される。II区北半の近世遺構検出地では、後で述べるように近代に大きな削平を受けて、耕土・床土の下面は地山で、遺物を含む層は認められなかった。一方I区とII区南半では、耕土・床土の下層に中世の瓦器を少量含む層が認められる。この層は数層に細分され得るが、各層上面が生活面とは確定し難かった。

第3節　遺構（第5～10図）

a）概要

I区は谷が大きく入り込んだ尾根上に立地する。調査の結果、I区の北側は、近代に入って谷を埋め立てた場所に相当することが判明した。I区南半とII区の北半については、瓦器の細片の出土をみるが、鋤溝と思われる小溝以外には顕著な遺構は検出できなかった。

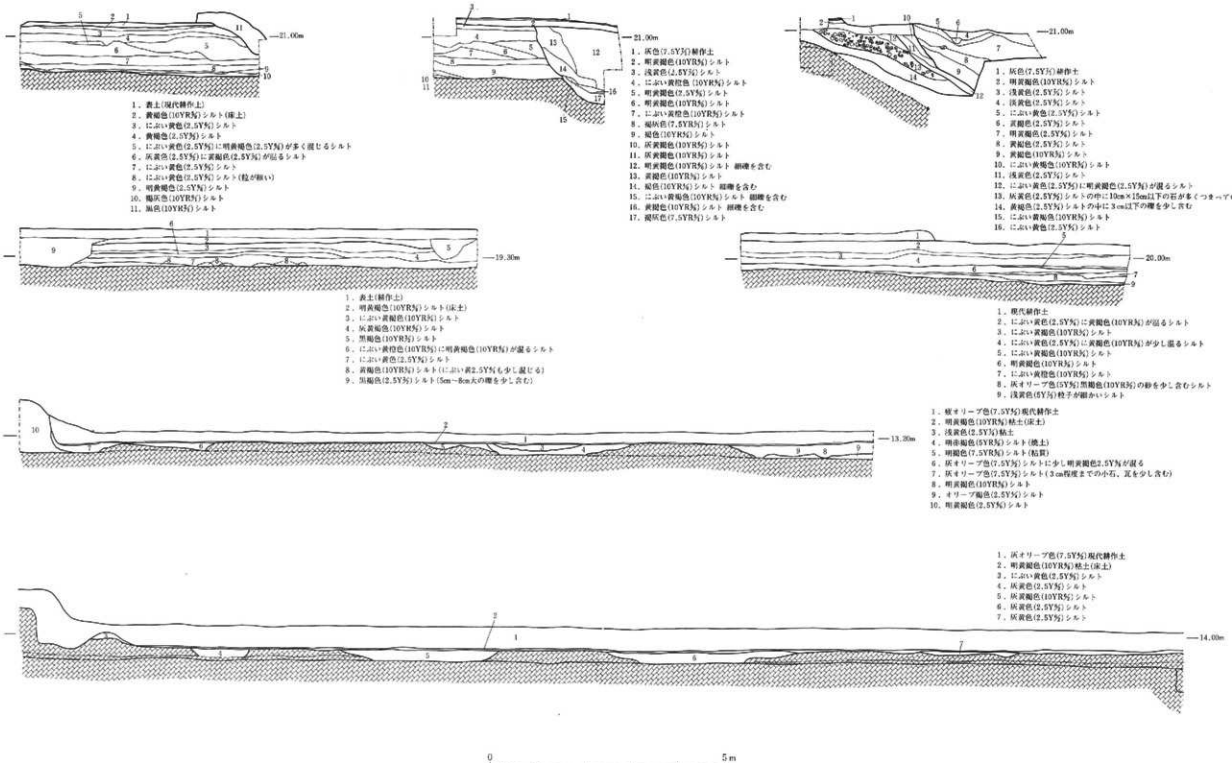
一方、II区の北半は、土壙を主とする遺構が多く検出された。これらの遺構内からは、瓦器や桃山時代と思われる陶器も出土するが、江戸時代の染付等と共伴する。江戸時代以前の遺物だけを出土する遺構がないことから全てが江戸時代の舞村に関係する遺構と考えられる。

ただし、9・11～14・121－OS、10・21－OO、15～20－OPは江戸時代の遺物を全く含まず、13－OSから瓦器の細片が出土したことから、これらは中世の遺構と考えられる。近世の舞村が所在したのは、上記の遺構群が存在する田地より北の田地であろう。近世舞村の所在地では、中世の遺構上に近世の集落が営まれ、さらに後に削平されることにより、中世に遡る遺構が検出されなかったものと考えられる。

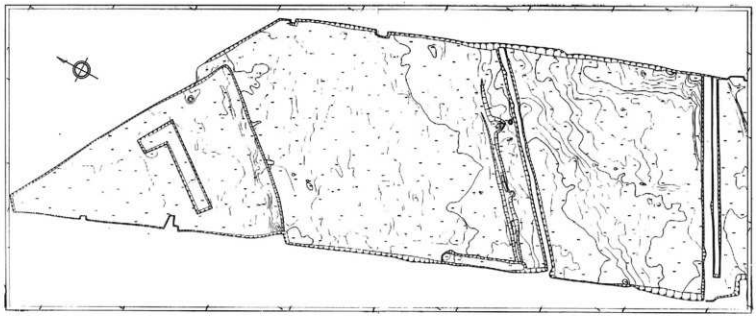
b）各検出遺構

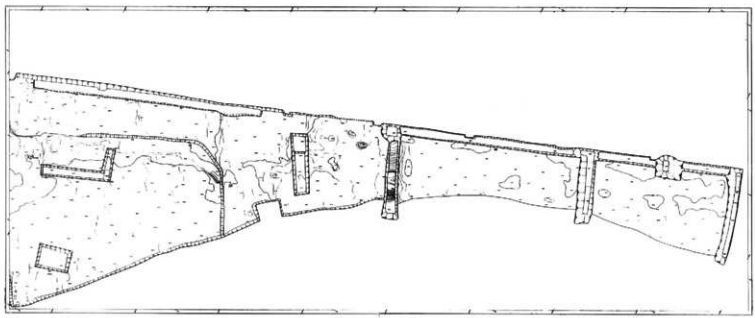
今回の調査で検出した多くの遺構のうち、特徴を持つ代表的な遺構について、記述する。

中世遺構群（第8・9図）　9・11～14・121－OS、10・21－OO、15～20－OPがこれに相当する。これらはまとまりをもって分布しており、それぞれが関連する遺構群と思われる。13－OSは尾根に対して直交して存在し、12－OSは尾根に対して平行する形である。両者は「T」字状に組み合っている。次にピット群は、柱穴の可能性が高いと思われるが、その組み合い関係は判然としない。ピット群の分布をみると、9・12・13－OS

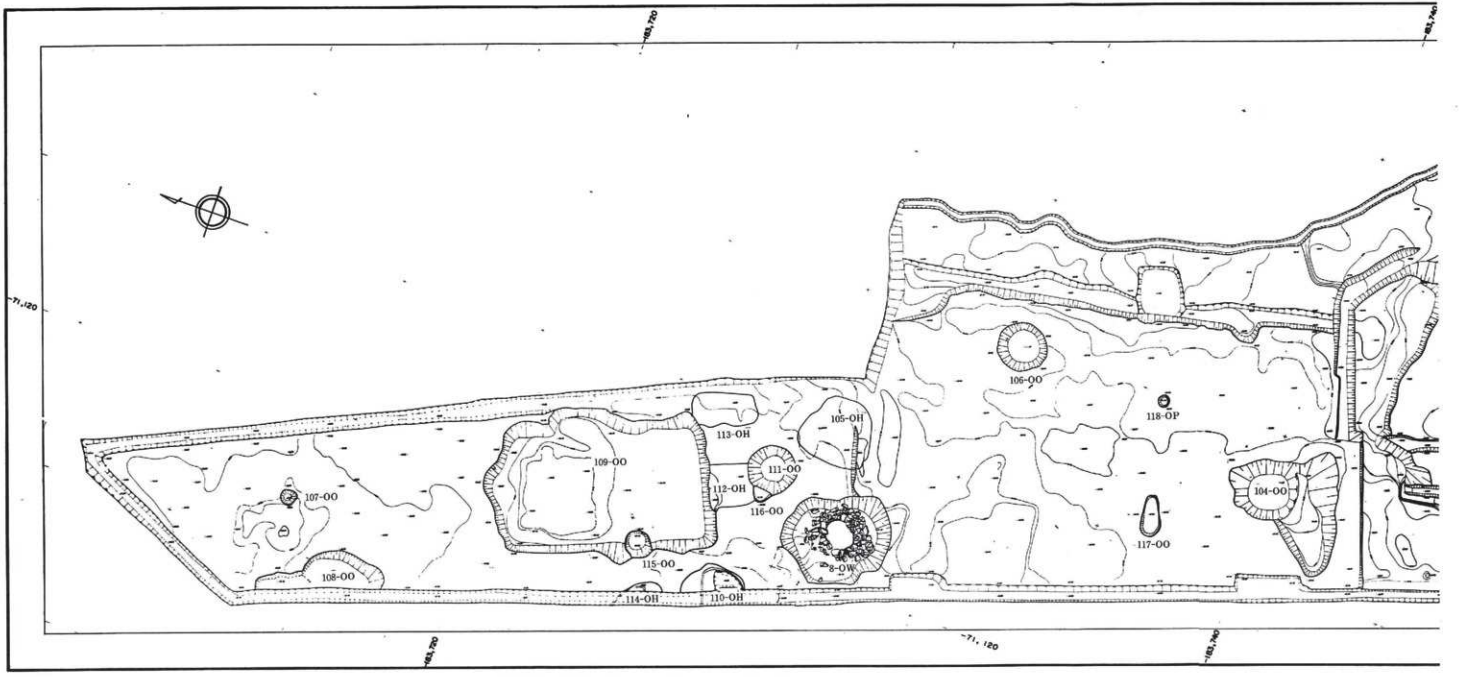

21.00m
1．表土(現代耕作土)
2．黄褐色(10YR⅝)シルト(床土)
3．にぶい黄色(2.5Y⅝)シルト
4．黄褐色(2.5Y⅝)シルト
5．にぶい黄色(2.5Y⅝)に明黄褐色(2.5Y⅝)が多く混じるシルト
6．灰黄色(2.5Y⅝)に黄褐色(2.5Y⅝)が混るシルト
7．にぶい黄色(2.5Y⅝)シルト
8．にぶい黄色(2.5Y⅝)シルト(粒が細い)
9．明黄褐色(2.5Y⅝)シルト
10．褐灰色(10YR⅝)シルト
11．黒色(10YR⅝)シルト
21.00m
1．灰色(7.5Y⅝)耕作土
2．明黄褐色(10YR⅝)シルト
3．浅黄色(2.5Y⅝)シルト
4．にぶい黄橙色(10YR⅝)シルト
5．明黄褐色(2.5Y⅝)シルト
6．明黄褐色(10YR⅝)シルト
7．にぶい黄橙色(10YR⅝)シルト
8．褐灰色(7.5YR⅝)シルト
9．褐色(10YR⅝)シルト
10．灰黄褐色(10YR⅝)シルト
11．灰黄褐色(10YR⅝)シルト
12．明黄褐色(10YR⅝)シルト 細礫を含む
13．黄褐色(10YR⅝)シルト
14．褐色(10YR⅝)シルト 細礫を含む
15．にぶい黄褐色(10YR⅝)シルト 細礫を含む
16．黄褐色(10YR⅝)シルト 細礫を含む
17．褐灰色(7.5YR⅝)シルト
21.00m
1．灰色(7.5Y⅝)耕作土
2．明黄褐色(10YR⅝)シルト
3．浅黄色(2.5Y⅝)シルト
4．浅黄色(2.5Y⅝)シルト
5．にぶい黄色(2.5Y⅝)シルト
6．黄褐色(2.5Y⅝)シルト
7．明黄褐色(2.5Y⅝)シルト
8．黄褐色(2.5Y⅝)シルト
9．黄褐色(10YR⅝)シルト
10．にぶい黄橙色(10YR⅝)シルト
11．浅黄色(2.5Y⅝)シルト
12．にぶい黄色(2.5Y⅝)に明黄褐色(2.5Y⅝)が混るシルト
13．灰黄色(2.5Y⅝)シルトの中に10cm×15cm以下の石がまくつまっている
14．黄褐色(2.5Y⅝)シルトの中に3cm以下の礫を少し含む
15．にぶい黄橙色(10YR⅝)シルト
16．にぶい黄色(2.5Y⅝)シルト
19.30m
1．表土(耕作土)
2．明黄褐色(10YR⅝)シルト(床土)
3．にぶい黄褐色(10YR⅝)シルト
4．灰黄褐色(10YR⅝)シルト
5．黒褐色(10YR⅝)シルト
6．にぶい黄橙色(10YR⅝)に明黄褐色(10YR⅝)が混るシルト
7．にぶい黄色(2.5Y⅝)シルト
8．黄褐色(10YR⅝)シルト(にぶい黄2.5Y⅝も少し混じる)
9．黒褐色(2.5Y⅝)シルト(5cm～8cm大の礫を少し含む)
20.00m
1．現代耕作土
2．にぶい黄色(2.5Y⅝)に黄褐色(10YR⅝)が混るシルト
3．にぶい黄褐色(10YR⅝)シルト
4．にぶい黄色(2.5Y⅝)に黄褐色(10YR⅝)が少し混るシルト
5．にぶい黄褐色(10YR⅝)シルト
6．明黄褐色(10YR⅝)シルト
7．にぶい黄橙色(10YR⅝)シルト
8．灰オリーブ色(5Y⅝)黒褐色(10YR⅝)の砂を少し含むシルト
9．浅黄色(5Y⅝)粒子が細かいシルト
13.30m
1．暗オリーブ色(7.5Y⅝)現代耕作土
2．明黄褐色(10YR⅝)粘土(床土)
3．浅黄色(2.5Y⅝)粘土
4．明赤褐色(5YR⅝)シルト(焼土)
5．明褐色(7.5YR⅝)シルト(粘質)
6．灰オリーブ色(7.5Y⅝)シルトに少し明黄褐色2.5Y⅝が混る
7．灰オリーブ色(7.5Y⅝)シルト(3cm程度までの小石，瓦を少し含む)
8．明黄褐色(10YR⅝)シルト
9．オリーブ褐色(2.5Y⅝)シルト
10．明黄褐色(2.5Y⅝)シルト
14.00m
1．灰オリーブ色(7.5Y⅝)現代耕作土
2．明黄褐色(10YR⅝)粘土(床土)
3．にぶい黄色(2.5Y⅝)シルト
4．灰黄色(2.5Y⅝)シルト
5．灰黄褐色(10YR⅝)シルト
6．灰黄色(2.5Y⅝)シルト
7．灰黄色(2.5Y⅝)シルト
0
5m

第4図　土層図（1：80）

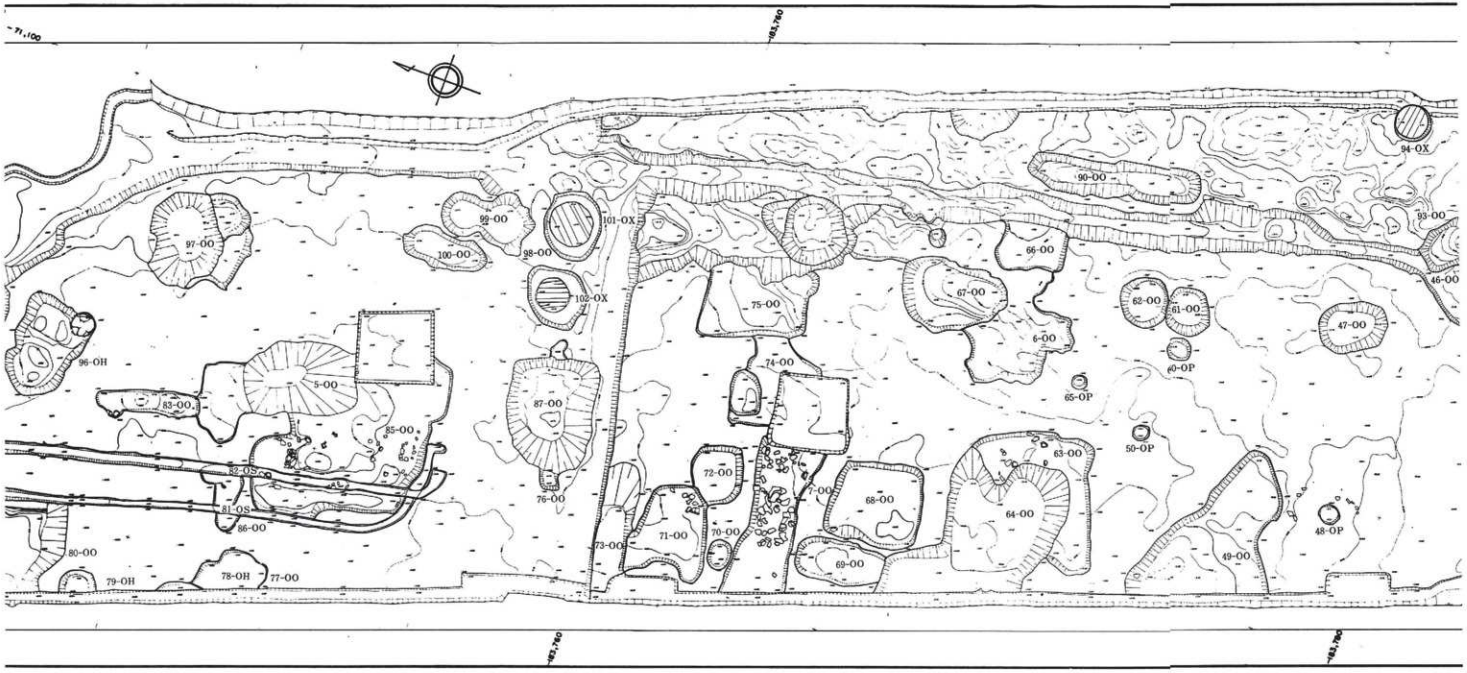




第5図　Ⅰ区平面図（1：200）



第6図　II区平面図1（1：100）



第7図　II区平面図2（1：100）